

郷土研通信



カラマツの紅葉

冷涼な気候に適応するのと成長が早いことから明治時代に本州から持ち込まれ、炭鉱の坑木などに利用された。

発行：てしかが郷土研究会 (Teshikaga Regional Studies Association)
北海道川上郡弟子屈町中央3丁目2-10 (松橋方)

文章責任：松橋 秀和

近況報告

・町民文化祭に参加

10月3日から5日、摩周観光文化センターで開催された「町民文化祭」に当会が発行する「郷土研通信」を展示しました。当会の活動状況を広く町民に知っていただくためには絶好の機会でした。



レクチャールームの壁を化粧

本棚の壁がコンパネと柱の素材が剥き出しで、殺伐とした感じがすることから壁紙で化粧をしました。

それでもまだ、郷土研らしいスタイルになっていない感じがするので、教育委員会が承諾すればですが、大壁画を設置する計画を検討

壁を化粧

討りたいのです。



勉強会

仁多獅子舞

復活の道のり

平成元（1989）年から途絶えてしまった「仁多獅子舞」が本年（2025、令和7年）三六年ぶりに復活をして、八月一九日の弟子屈神社例大祭の宵宮祭で舞が披露された。

復活までの苦心譚は弟子屈公式チャンネルで公開されているが、個人で視聴するのはかまわないが、別の媒体で上映することは著作権上の問題があることから弟子屈公式チャンネルに当会の勉強会で視聴したい旨を伝えたところ、ご配慮をいただき視聴させていただきました。

視聴を終えた後、会員の個別獅子舞の関係者から、一時期二つの獅子舞（鎧別・仁多）が活動を中止した経緯やその後鎧別獅子舞が復活した経過を話され、会員の知見などの発言があった。小林会員からは後日のた

め「仁多獅子舞・鎧別獅子舞」資料編」（公開されている資料を中心に）が提供された。

ふるさと歴史館では、入り口に古い時代の「仁多獅子舞の獅子頭」が展示されている。また、今回の映像を町民文化祭・芸能部門の開催日に公開を予定している。



次回の例会

令和七年二月一九日（水）

一九〇〇

ふるさと歴史館

勉強会

未定

むかしむかし写真館

No. 359

川湯温泉の元祖 浅野清次

会員 酒井盛興

①

川湯温泉最古の温泉宿？

明治一九年硫黄山の景気に目を付けて料理屋兼旅館を建てたのが「そば屋の貞蔵」と呼ばれた高橋貞蔵である。しかし、そこは硫黄山の荒くれ鉱夫たちの博打場と化し、商売に成らず逃げ出してしまった。その跡地を斜里方面から



浅野清次の川湯屋温泉旅館



写真の撮影時期は不明だが、おそらく「浅野清次」が旅館を建てる以前のものでと思われる。旧川湯グランドホテルが建っていた所だが、西裏側の土手の上から撮影している。目につくのが右手の骨組みだけになってしまっている小屋（おそらく風呂）であろうが、どちらが貞蔵のものか初太郎のものはわからない。

とされています。

浅野氏は人気の無かった川湯に温泉宿を開き、昭和年代の開発期まで川湯温泉の主として守り通しました。

浅野清次とは

『弟子屈町商工のあゆみ』中の「座談会第二部」にこんな記述がある。

司会

浅野清次さんと言う方は五月女十次郎さんから見るとどういう人だったのでしょうか。

五月女

浅野清次さんというのはね、白虎隊の生れたとか何とかいってね。私の家が養子やっただけで、本籍が分からないでね。大正九年の水害の時に、私の家内の兄貴が木材組合にいてね、青森県の田名部という所に集材に行つて、初めて浅野清次の存在を知った。

戸籍を調べたら、昔は失踪と、そういう具合になっていた。

司会

そうしますと、どうして川湯で旅館を始めたのかといういきさつ、分かりますか。

五月女

最初は札幌の豊平あたりに移住したわけなんです。北海タイムス主催で博覧会（昭和二年の第一回農業博覧会）やつた時に行つてみてね、根室の屯田が入る時に建築か何かで請負師に、そして帰らずに居て標茶にもしばらくおつたし、それから川湯のアメマス川の方へ来て造材やって、あそこ池の湯の方に、製軸工場があった。そこらの製軸材を出したりなんかしてたんだね。

更科（源蔵）

私も聞いた話じゃ、亡くなる時にオ

レの墓は飯盛山にあると言って亡くなったと聞いてますけどね。だから白虎隊の中で分からなくなつたんでしよう。

会津藩士

戊辰戦争では年齢的に白虎隊より年上の朱雀隊、敗戦後脱藩か逃亡（失踪？）↓札幌↓根室（明治一九年）根室和田村に屯田兵屋建設に携わつたようだ。

五月女氏の次男五月女克氏に渡された資料の中に重要な事が書き込まれていた。「浅野清次」というのは世をしのぶ飯の名で、正しくは「赤川清次」年齢からして朱雀隊の出身。父は同藩士「赤川清之助」寄合侍分（家柄や功労のある比較的高位の無役の武士）と思われる。

蝦夷地に渡つた後の所在が確認されるのは根室市である。両親が当時青森県下北郡田名部に住んでいたとき、根室の長田市街地に住む清次を父親が訪ね、ひと月ほど滞在している。この頃、清次は根室和田村兵屋建設の仕事で根室に滞在していた、とす



戊辰戦争で敗走した元会津藩士の生涯「俺の墓は飯盛山にある」藤 泰人 著より

れば清次の父が訪ねたのは明治二〇年前後と推察できる。その滞在に対する父清之助からの札状が五月女家に遺されている。これを筆で書かれると読めたものではないが専門家の手によるのであろう「このように読むのが良さそう」というものが残されている。残念ながら原書は失している。たまたま遺児克氏がカメラで複写していたものが残されていた。今となっては貴重な記録だ。惜しくも年号がないので時期的なもの分らないが「根室長田市街」の文字が見られるので、清次が屯田兵屋の建設にやつてきた時期である。父から藩の動静など正確な情報を得て、清次も安心したのでは無いかと思われる。

甚暑之節罷候も家内無事罷申候陳者其地へ罷出候節ハ永々御世話ニ相成リ忝存候 道中モ格別ニ障モ無之 本月廿三日安着致候 其地之模様 母へモ相語候 処無事ニ工業致し居候。此先も身体保護之上 勉強致罷様祈候 右者 其地滞留中之禮状迄 後日申候成 七月廿八日 赤川清之助 清次様